

ガーデンシティ誕生の背景と日本の郊外住宅地

1 ハワードの提案した田園都市思想と レッチワースガーデンシティに学ぶ

(1) イギリスに田園都市が生まれた背景

一九〇三年、イギリスのロンドン郊外に世界で初めての田園都市レッチワースが生まれた背景には、イギリスの産業革命末期の人口の都市集中と、労働環境や住環境の劣悪化がある。これらを改革しようとした人々の中にウイリアム・モ里斯（一八三四～九〇）達がいた。時代が求めた工業化への反発と、地域共同化や自然と一体化した生活を大切にする運動の波はアーツ・アンド・クラフツと呼ばれた。

(2) ハワードの田園都市思想

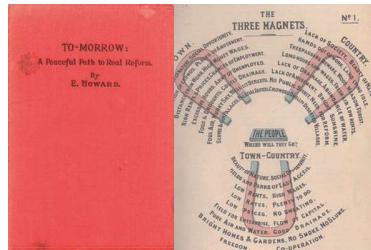
このような動きの中、社会改革と理想のコミュニティを求めて、エベネザー・ハワード（一八五〇～一九二二）が「明日—真の改革への平和な道」（一八九八）を出版し、その中で「田園都市思想」を提案した。この思想の中心となるものは「田園と都市の結婚」であった。ハワードは、都市においては収入や娯楽等の面で優れているが、自然・家賃・環境等の面においては劣つてお

レッチワースのタウンセンターとブロードウェイ
(空撮:齊木崇人、1998年)





レイモンド・アンウインと著書
「住宅建築の芸術」

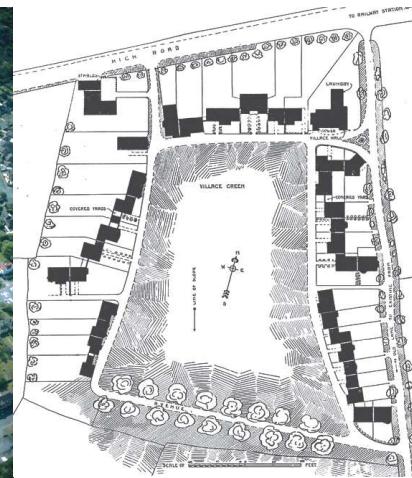


エベネザー・ハウードと
著書「明日——眞の改革
への平和な道」

り、田園ではそれらが逆転しているとし、両者の長所を生かした「田園都市」をつくることによって、その当時抱えていた住環境の問題を解決できると仮説した。そしてその「田園思想」の実践の場として、レッチワースの土地が選ばれ、田園都市思想を具体化する都市デザインとして、アーツ・アンド・クラフツ運動に深い関わりをもつていた、レイモンド・アンウイン（一八六三～一九四〇）とバリー・パークー（一八六七～一九四七）のアイデアが採用された。

(3) レッチワースの空間デザイン

その後、アンウインはハウードの理念を住宅デザインとして空間的に可視化する役割を担っていくが、実はレッチワースの建設が始まる三年前にアンウインはパートナーである義弟のパークーと、コミュニティづくりと住宅のあるべき姿を提案した「The Art of Building A Home(住宅建築の芸術)」を出版し、人間にとつて価値ある美しい空間を創っていくという考え方で、広場を馬蹄型に囲み、人々が集まる空間をそこに提案している。アンウインは一九〇一年にイギリスのボーンヴィルでハウードと出会い、レッチワースの仕事を獲得する決意を固め、計画敷地の現場に六週間泊り込んで自然条件や景観条件を詳細に調べ、それらを丁寧にハウードの田園都市の提案に盛り込んでいる。アーツ・アンド・クラフツの流れを受



「住宅建築の芸術」に示された
馬蹄型の集落とレッチワース
のビレッジ・グリーン（撮影：齊
木崇人、1998年）

け、中世から続く町や集落の空間構成や住まいのデザインを学び、新しい住まい方を提案した。レッチワースの計画段階では、イーストアングリア地方にあるカージー・キャベンディッシュの集落構成にみられるビレッジグリーンがデザインに生かされ、その影響を垣間見ることができる。レッチワースの秩序ある空間形成に見られる八つのデザイン原理には、
①レッチワースの微地形を生かす、②多様な街路空間の構成、③わかりやすい住居集合の単位、④共有地のビレッジグリーンと前庭、⑤多様な種類の住宅とその集合パターン、⑥居住地を取り巻くグリーンベルト（農地）、
⑦集落規模を基礎とした小さなコミュニティづくり、⑧経験に裏付けられたわかりやすい約束事、等が挙げられる。

レッチワースの建設後、レイモンド・アンウェインは一九〇九年「Town Planning in Practice」という本を著した。この本が一つのきっかけとなり、イギリスの大学に続き、アメリカの大学にも都市計画の学部が誕生した。今日アメリカで展開するニューアーバニズムの運動にも大きな影響を与え続けている。

(1)

2 田園都市思想の影響を受けた「田園郊外住宅地」から 戦後のニュータウン建設へ

日本に取り入れられた田園都市思想



大美野田園都市住宅博覧会
(大阪府堺市、1932年)

ハワードの田園都市思想は、二〇世紀初頭から欧米諸国の都市計画に大きな影響力を及ぼした。日本も例外ではなく、一九〇六年に東京帝大農学部教授の横井時敬（一八六〇～一九二九）が讀賣新聞に連載していた評論「都會と田舎」で田園都市思想が初めて紹介されている。

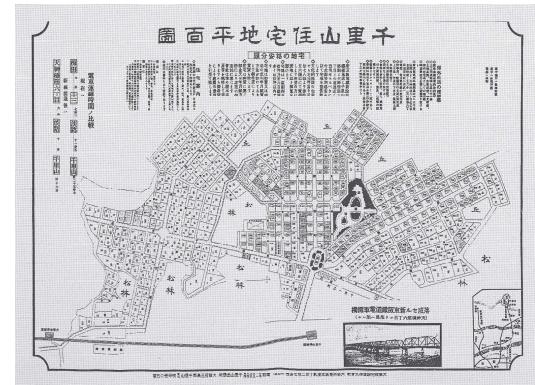
翌年の一九〇七年、内務省地方局有志編纂により「田園都市」が出版された。これが「ガーデンシティ＝田園都市」という訳語の普及につながったと言われている。しかし、この本はハワードの田園都市思想に焦点を当たものではなく、A・R・センネットの著作を中心に紹介し、欧米各国の都市・農村計画の事例と対比しながら日本国内の田園地域の実情が論じられている。

翌一九〇八年には、神戸市外事係長であった生江孝之（一八六七～一九五五）がレッチワースを訪問し、日本人として初めてハワードと面会している。後に「日本社会事業の父」と呼ばれる生江は「田園都市思想」と「レッチワース」を「ソーシャルシティ」の視点から捉え日本に紹介した。

(2) 田園郊外の誕生

明治期から戦前の日本では、田園都市思想は「農村の活性化」のための方策として解釈されていた。しかし都心と対比した田園生活の長所は常に前面に出されており、そのことが中産階級の人々の心を捉えた。結果と

千里山住宅地平面図(大阪府吹田市、1938年)



生江孝之
(1867年～1957年)

して、大阪・池田新市街「室町」(一九二〇年)、芦屋・六麓荘(一九二九年)、大阪・大美野田園都市(一九三三年)、大阪・千里山景勝邸宅地(一九三八年)、伊丹・新伊丹住宅地(一九三五年)、西宮・夙川香櫻園經營地(一九二八年)、東京・田園調布(一九二三年)、東京・国立分譲地(一九二六年)、東京・成城学園分譲地(一九二八年)等が、第二次世界大戦前までに、阪神間や首都圏を中心に次々と開発された。

これらの計画された住宅地の機能面から見ると、「ガーデンシティ」というよりも、「田園郊外(ガーデンサバーブ)」であった。しかし、幸いなことに、これらの住宅地は、「ガーデンシティ」という価値や目標そして夢を住民同士が共有してきた結果、現在まで生きつづけている。また、当時の供給者側には「社会資本をつくる」という意識があった。

その後、戦後の高度経済成長期へと展開し、都市部への人口集中を補うために、短期間に住宅の大量供給が行われるようになる。いわゆる「ニュータウン」が、都市部周辺の田園地域に出現し始める。

(3) 戦後の日本のニュータウン建設と再生課題

戦後の住まいのモデルをつくってきた、日本のニュータウンの建設は、大阪・千里ニュータウン(一九五八年)にはじまった。次いで、名古屋・高蔵寺ニュータウン(一九六一年)、東京・多摩ニュータウン(一九六五年)、茨城・筑波研



筑波研究学園都市(写真:齊木崇人、1979年)

究学園都市(一九六三年)、横浜・港北ニュータウン(一九七四年)など、三〇〇ヘクタールを超えるニュータウンが四十数地区建設され、サラリーマン家族のための住まいが郊外居住地として誕生した。これらのニュータウンはそれぞれ立地の特性を持ちつつも、均質な住まいが量産を目的に建設された。今日では住まいの老朽化、人口減少による空家の増加、売却された土地の細分化による住宅の過密化、コミュニティの崩壊、タウンセンターの老朽化による機能不全など、わずか五〇年を経たばかりのニュータウンがオールドニュータウンと呼ばれ、解決できない歪みを指摘されている。私たち「オールドニュータウン」の「住まい」とその「環境」の再生への手掛かりとして、今日これららの歪みを抱えた郊外住宅に五つの背景を指摘する。

①今日における人口の減少を予測しきれなかった。増加を目標とする計画人口は論議するが、人口が減少後の計画変更と、次世代の目標とする質の高い居住環境が準備されなかつた。

②量産計画による短期集中開発と当時の最高水準の住宅を提供できたが、その後四〇年を経て持続的に水準が維持できず、未完成の計画は陳腐化し、設備の更新も不十分であること。

③近隣住区理論に適した計画敷地選定が優先され、郊外居住地の風土や地域の固有性は配慮されることが少なく、そのまま地図上に計画が書き



神戸須磨ニュータウンの
まちなみ(空撮: 齋木崇
人、1990年)

込まれ、一見無駄の無いそして合理的な計画が実施されたため、その後の社会の要求や変化に対応するフレキシビリティーに欠け、特に新しい居住環境形成の要求に応える敷地の余裕が無かつた。

④既存の郊外住宅地や既存のまちと分離し建設され、島状の郊外住宅地を生みづけ、それぞれの住宅地に住む人々も意識を異にし、既存の行政体も郊外住宅地を特別扱いにしてきた。

⑤郊外住宅の再生のプログラムが無かつたこと。特にニュータウンは公共の賃貸集合住宅の比重が大きく、次々老朽化していく集合住宅の自己再生力が無い。さらに民間の戸建て住宅地は宅地が分割され更なる小規模宅地に変容し、住宅地の居住密度が高くなり、環境の市場評価が下落し続けている。

これらの歪みは、互いに関連しつつ「オールドニュータウンの衰退」という、古くて新しい課題を投げかけている。